

快氣散并柰調散 堂上山科家之所調合也

保童圓 堂上富小路家製之、豐心丹亦然

屠蘇白散并度瘴散 丹波氏祖康賴、出自後漢靈帝末○中至其末裔醫術日々衰、纔領三十石之祿

是爲屠蘇料、每年臘月晦日製屠蘇白散并度瘴散、獻禁裏院中、且捧官家而已也、舊記屠蘇之屠字

加一點爲屨、忌尸之字而加點者乎、是本朝之故實也、近世醫家曲直瀨道三傳丹家之術而大興家、

延齡丹○中 天文年中洛陽有曲直瀨道三者○中 門人玄朔爲婿傳醫術、玄朔相續仕公方家號延

壽院、自製延齡丹而救人、玄朔之末裔、代々少年日暫束髮與半井家之嫡子交爲典藥頭、遂稱和丹

兩家、今世業醫術者多出自斯兩家之門、

蘇香圓○中 號士佛、以士字從十從一、而亞十佛之謂也、其末裔連綿而仕公方家、曾製蘇香合圓傳

家、救人之急○中

豐心丹 傳言與正菩薩叡尊、住南都西大寺、於茲爲救諸人之疾苦、製斯藥以傳于世、故世稱西大寺

藥、今省藥字、專謂西大寺○下

〔本朝醫談〕奇應丸は、永正の頃、東大寺の太鼓破れて張かへんとて見れば、ふるき皮のうらに藥方

書付てあり、製して用るに、奇應ありければ、依て名づく、と、雙桂集に見えたり、返魂丹は、儒門事親

方妙功十一丸の變方也、金屑丸は、局方金液丹の變方なり、安神散は、導道師の製にて、妙香散の變

方なり、延齡丹は、蘇合香圓の變方なりといふ、說非なり、蘇合香圓本名吃力伽丸とて、木を用ひ、安

息蘇合犀角等あり、元來梵醫の鬼病を治する藥なり、延齡丹は、それらの品なく、咽喉を利し、呼吸

を通ずるを主とす、順氣の藥にして、導道師一溪翁受授相傳の方なりと、預藥集に見えたり、夫咽

喉は、氣の路なり、氣は生の本なり、呼吸通順なれば、目明にして、耳きこえ、四肢百骸五臟六腑皆と

とのふ、呼吸の本を知るものは、道心人心君火相火を語るべし